

歴史



history



芭蕉も訪ねた尾花沢
ゆかしき里の、風情を探しに

尾花沢で詠まれた発句
涼しさを 我宿にして
ねまる也
芭蕉

HISTORY of Obanazawa

芭蕉を巡る 散策コース



芭蕉が歩いた 山刀伐峠

元禄2年(1689年)、芭蕉と門人の曾良は隣町の最上町より「おくのほそ道」でも最大の難所と言われている山刀伐峠を越えて尾花沢(鈴木清風宅)にやってきました。現在、芭蕉が辿ったブナ林の道が「歴史の道」「おくのほそ道・山刀伐峠越」として整備されています。峠道の全長は約3.8kmで、頂上の標高は約470mです。



「歴史の道」「おくのほそ道・山刀伐峠越」



奥の細道山刀伐峠頭彰碑

おくのほそ道

みち

江戸幕府が繁栄を極めた元禄時代に、俳人松尾芭蕉は江戸深川を旅立ち、約5か月をかけて全行程2,400kmを旅しました。その中で書いた紀行文と俳句が「おくのほそ道」です。芭蕉は元禄2年(1689)5月17日(現在の7月3日)、門人曾良を伴い鈴木清風を訪ね、ここ尾花沢に10泊しています。

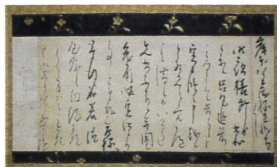


柿本人麿像(鈴木家所蔵)
[芭蕉来訪展の時のみ展示]

芭蕉、清風 歴史資料館★

☎0237-22-0104 / 開館時間 9:00~16:30
入館料: 大人210円・学生100円・中学生以下無料
休館: 水曜、年末年始

鈴木清風邸跡の隣にあり、「おくのほそ道」関連資料のほか、雪国の民具も展示。特に芭蕉真筆2点は、元禄6年に岸本八郎兵衛に宛てた手紙であり、貴重な資料です。資料館自体が芭蕉と清風をしのぶ江戸末期の町家を移転復元した、貴重な建物です。



芭蕉真筆(岸本八郎兵衛宛書簡)

松尾芭蕉と 鈴木清風

芭蕉と清風は、江戸で俳諧を通じて出会いました。「おくのほそ道」紀行で尾花沢の鈴木清風を訪ね、10泊しました。芭蕉は『おくのほそ道』に「かれは富める者なれども志卑しからず」と記しています。清風は、元禄期における出羽の豪商で、風雅にも心を寄せた人物でありました。江戸を出発してから49日間も旅してきた芭蕉を、清風は手厚くもてなしています。心に豊かさを求める人々の願いは変わりません。



養泉寺

芭蕉が尾花沢に10泊したうち、養泉寺に7泊しています。境内には、芭蕉が詠んだ句を石に刻んだ「句碑」(宝暦12年・1762年建立)があり、涼塚と呼ばれ人々に親しまれています。また、最上三十三観音の一つであり、第二十五番札所となっています。



尾花沢まつり

(8月27日、諏訪神社例祭)



豊年踊り



離子屋台★

尾花沢雅楽★

尾花沢雅楽は三管三鼓で構成され、江戸時代寛政年間(1789~1800)に伝えられたとされています。雅楽は、念通寺門徒に伝承され「念通寺雅楽」として代々維持されてきました。近代になり、一時廃絶の危機がありましたが、1974年に尾花沢雅楽保存会が発足し、伝承されて今に至ります。尾花沢雅楽は市指定の無形文化財です。



まつり離子★

尾花沢まつりばやしは、京都祇園ばやしの系統を引くと言われ、約200年前の諏訪神社再建を祝って奉納されたと言われている市指定の無形文化財です。現在は、大人から子どもまでが伝承活動を行っており、尾花沢まつりで、雅(みやび)で格式高い音色を響かせています。



史跡 延沢城跡

戦国時代、尾花沢周辺で活躍した野辺沢氏。満重、満延、光昌の3代が延沢城周辺を支配していた時の山城跡です。大正ロマン漂う銀山温泉は、延沢城の東方にあり、延沢銀山と呼ばれていました。1985年12月、延沢城跡、銀山の銀坑洞、山の神社が一体となって国指定史跡となっています。



★マークは「日本遺産/山寺が支えた紅花文化」の構成文化財に選定されています。